不思議の鈴

著コナンドイル

訳三津木春影

はじめに

国会図書館近代デジタルライブラリーで公開されている昔々のホームズです。

これはパブーの画面では細かすぎるようです、ＰＤＦをダウンロードして、閲覧モードでご覧ください。

次ページの最後に、フルスクリーンモードと書いていますが、誤りです。

「ホームズとあそぼう」続編です

不思議の鈴（海軍条約文書事件）

大正四年、三津木春影訳、磯部甲陽堂

一九世紀のロンドンには、保村とか穂室とか、蛇石博士などという日本人が闊歩していた…いや当時のロンドンは空前の日本ブーム、だから日本人的な姓を名のることが流行っていたのです。（嘘）

シャーロック・ホームズ「不思議の鈴（ベル）」実は「海軍条約文書事件」須賀原（ワトスン）栗瀬（フェルプス…文書を紛失した男）などの言葉は今読んでも違和感がないのに、なぜか保村（ホームズ）の言葉だけがおかしくて変なのですが、読んでみると結構面白いです。

剣橋大学なんて、誰が最初に使ったんだろう?そういえば蛇石博士、蛇はジャで石が岩だったらロック、ジャロック→シャーロック…笑

これは国会図書館近代デジタルライブラリーで公開されているものですが、可能な限り読みやすくということを目標に変換してみました。

文字を拡大するために余白を可能な限りカットしています、そのためページナンバーをはじめ一部の文字が消えている場合があります。また行の歪みもありますが、これは公開されているスキャン画像の歪みのままです。

国会図書館が公開してくださっているのですから、それらを読んでみるのもまた面白いのではないかというのが動機なのですが、残念ながら図書館サイトにアクセスした状態のままでは読むに耐えません、せっかくの公開ですから改良を望みたいところです。

最初は同じ三津木春影訳の「禿頭組合」を予定していたのですが、これはすでにあるサイトで公開されていましたのでこっちを選びました。

文字が小さいようでしたら、ＰＤＦにして、フルスクリーン表示にしてみてください。（どうなるか?作成途中なので本当はわからないのですが…）

不思議の鈴

三津木春影譯

一　外務省の舊友の手紙……一大災難とは何ぞ？

我が民間大探偵保村俊郎君は、まだ寢衣姿にて側室に向ひ、一心不亂に何やらん化學上の研究に熱中してゐた。一個の大形の彎曲した蒸餾器が、ぶんせん火口の蒼い炎の中でグラ〳〵と煮立ち、蒸溜液は一升ほどの量にまで凝縮されてゐる。予が室内へ入つて行つて

も、彼は暫乎と瞳を動かしたばかりで又もや研究に夢中になつてゐるので、餘程重大事件に相違ないと思つたから、予は肘掛椅子に腰掛けて手の明くのを待つてゐた。暁めてゐると、此方の壜を上げて見たり、彼方の壜を下げて見たり、硝子の移液管でどの壜からも數滴づゝを抜き出して見たり、終ひに溶液の入つた一本の試験管を卓子の上に持つて來た。右の手にはりとます試験紙を一枚持つてゐる。

『須賀原君、君は危急いところへ參つたね。この試験紙が青のまゝで居れば無難であるが、赤に變つた日には人間一人の命にかゝはるのだ。』

と言つて試験管の中へ浸すと、紙片は見る〳〵鈍い暗紅色に變つた。

『フン！　私の思ふた通りぢや！　君、直きに御相手をするからね一服やつてゐてくれ給へ。』

彼は机に向き直り、數通の電報を急がしく認めて給仕に渡した。それが済むと、向ふ側の椅子にドッカと腰を下ろし、膝を組めて兩手をヒョロ長く痩せた両腮の上で組合せる。

『平々凡々、些細な殺人事件だ。須賀原君、君の方がよつぽど面白い種が有りさうだね。それは何？』

と予の手に持つた一通の手紙に目を付ける。で、それを渡すと非常

に注意を緊張させて讀み始めた。

其手紙には實に次の如き文言が認めてあつたのである。

我が親愛なる須賀原直人君よ――兄が三年級の時に五年級にありし「蜥蜴」の栗瀬を兄は必ずなほ記憶し給ふべしと信じ候。なほ生が叔父の縁故によりて、外務省に好位置を得、信用と名譽とを博し來りしことも定めて耳にし給ひし所ならんと信じ候。然るに今や突然戰慄すべき一大災禍に遭遇して、生が未來の道程は挫折せられたり。

其恐るべき事件の詳細に至りては筆紙の盡すべきに候はねば、幸ひに兄が生の懇望を容れ給ひて御面會の榮を賜はらば、其際懇と御物語りいたす心得に御座候。生は昨今漸く九週間の腦膜炎より恢復いたし候間際にて、尚ほ頗る衰弱いたし居り候。兄は兄の親友保村俊郎氏にゑひて御同伴を願はれ度く候や。警察の方にては最早策の施すべき餘地なきやう斷定いたし居り候へば、生は本事件に對する保村氏の見解を是非共拜聽致し度く念じ居り候。兄よ、願くは一刻も早く同氏を同伴せられん事を。この恐怖すべき不安の中に住む生にとりては、一日千秋の思ひに御座候。或は何

故に其際至急同氏を煩はさゞりしやとの御疑念も有之候はんかなれども、そは同氏の技倆を疑りての辭退にてはこれなく、全く打擊を蒙り候以來、意識朦朧たりしが故なることを同氏に宜しく御傳へ下され度く候。今や生の頭腦は再び明晰と相なり候。たゞ再發を恐れて多くそれにつき思念致さゞるのみ。されども衰弱中に候へば、此手紙は餘の者に筆記いたさせ候て差上申候。願くは御便宜御計り下され候て保村氏を御勸め下さる事を。敬具。

王琴町字降矢にて

書學友

讀み終つた保村君曰く、

「この栗瀨律夫君といふのは君の學友ぢやね。」

「學級は二年上だつたが、同年輩ぐらゐだつたから親友だつたよ。非常に秀才でね、學校の賞與はいつも彼に占められたつけ。そしてとう〳〵奬學資金を讓て、ます〳〵景氣よく帝橋大學へ入つたが何でも緣故が大層好くて、例の保守黨の大政治家堀戸春容卿は、彼の母の兄弟に當るといふことは、その頃子供であつた僕等にも解つ

てゐた。併しこのピカ〳〵光つた親類を有つてゐるといふことは、學校では餘まり彼のために利益にもならなかつたね。ならないばかりぢやない、僕等は寧ろ一種の反感を抱いて、運動場で彼を追ひ廻したり、クリッケットの道具で脚を打つ擲つたりして兎角酷い目に遇はしたものさ。だが、一旦學校を卒業して社會へ乘出したら形勢が一變した。天稟の才能と、今言つた有力な縁故とのおかげで、外務省の好い椅子を占めたといふことは仄かに聞いたけれども、其後全く忘れはてゝゐたのに、突然この手紙を受けて久振りで想ひ出してやうな次第でね。』

『成程、突然に舊友に縋りついて來たといふわけぢやね。』

『全く、この手紙を讀んだら何だか僕は感動させられた。繰返し〳〵君を連れて來て貰ひたいといふのだから何となくあはれでね、むづかしい忘も當つて見やうと思つたのさ。一つは君といふ人は事件に對して非常に興味を持つ人で、熱心に頼み込めば毎時でも快く腕を貸してくれることを知つてゐるから、家内にも相談すると大賛成でね、直ぐに行つてお上げなさいと勧められたので、早速御邪魔にあがつたやうなわけなのさ。』

保村君は手紙を戻しながら、

「併しこの手紙だけでは何の事やら當りがつかぬ。」

「僕にも解らない。」

「この手蹟は面白いね。」

「けれども、自分の手でないことは手紙に斷つてある。」

「それは知つてゐる。これは女の手だ。」

「男には違ひないさ！」

「いや、女だよ、而も珍しい性格の女の手だ。先づ見給へ、研究の第一歩としてちやね、かういふことを知つて置くのも何かの足しにならう——それは、君の友人は、善惡何れにせよ、通常人と異つた性格を有つた或者と密接の關係を有してゐるといふことである、いや、我輩にはこの事件が面白くなり出したぞ。君の用意さへ宜くば直ぐにも王琴町へ出掛けやうではないか。そしてそのやうに難儀をしてゐる外交官と、この手紙を筆記した婦人とに會はうではないか。」

二　大臣よりの重大使命……美人を傍に物語

幸ひにしてうおーたーるー停車場發の朝の汽車に間に合ふ事の出來た我々は、一時間と經たぬ間に、王琴町の樅の樹と、薔薇色の花

を開くひーすの樹との間を歩いてゐた。降矢の栗瀬家は、停車場から五分とはかゝらぬ近さの廣い地面の中にポツリと隔絶れて建てられた大きな邸宅であつた。

名刺を出して案内を乞ふと、直様一つの美々しい装飾のある客間へと通され、待つ間程なく一人の肥え太つた男が出て来て、甚だ慇懃に我々を厚遇するのであつた。年齢は三十と四十との間、寧ろ四十近い方で、頬の澤々した血色と言ひ、眼の樂しさうな輝きと言ひ中年の老けた年齢にも似合はず、まだ活潑な腕白小僧の面影を見せてゐる紳士である。

「ほんとに好うこそいらしつて下すつた。」と彼は心から悦ばしさらに我々の手を握つて「栗瀬はもう今朝から貴君方の御出ばかりを待ち焦れましてな、未だ御見えにならぬか〳〵と絶間なしに催促致し居つたのですよ。誠に氣の毒な至りで、まア溺れる者は藁でも摑むと申した狀態ですテ。栗瀬の兩親が私に代理に御接待申上げてくれいと申すことで……それと申すのが、此問題についてお話しするさへも辛いからと切ながりますのでな。」

「いや、私共はまだ何の詳しい事も存ぜん。」と保村君が言つた。「貴君は御見受け申すところ、御家族の方でもおありなさらんやうです

な。』

と言はれて向ふは驚いた様子、そして暫乎と流眄をくれて笑ひ出した。

『ハヽヽ、私の小金盒（懐中時計の鍵に付ける装飾物）の「よ、は」といふ略字を御覧になつたのですな。いや、それならば不思議もありませんが、どうしてお解りかと一寸驚きましたよ。私は奥瀬春蔵と申しまして、實は栗瀬が私の妹の千嘉子と結婚することになつて居りますので、まア親戚關係にならうといふものでございます。妹は栗瀬の室に居りますが、それはもう二ケ月の間といふものは帶も

解かずに看護致しましたよ。兎に角、病人がどのやうにか待ち遠しくて居りませうから、直ぐに彼方へ御願ひ致しませうか。』

更に我々の導かれた室は、客間と同じ床にあつて、一部は居間に一部は寢間にあてられた體裁、偶々には種々の花などが綺麗に飾られてあつた。蒼白めて憔悴した一人の青年が、明け放つた窓際の長椅子の上に横つてゐる。窓からは庭園の豊な草木の匂ひや、香ばしい夏の空氣が入つて來る。青年の傍には一人の婦人が腰掛けてゐたが、我々の姿を見ると立上つた。

『律夫さま、私はあちらへ參つて居りませうね。』

青年は女の手を取つて引留めておいて、さて徐に、

「やア、須賀原君、しばらく、御変りもなかつたかね。その髪の塩梅では途中で遭つても御互に解るまいよ。この方が君の親友の保村さん？」

予は簡単に彼を紹介した後、共に椅子へ腰を下ろした。興湖といふ男は室外へ出て行つたが、妹の方は病人に手を取られたまゝで留まつた。非常に人目を惹く容貌で、少し肥え過ぎて背の低いところが釣合が悪いとは言ふものゝ、顔色は阿利布色の美しく、眼は伊太利式に大きく黒く、毛髪は房々と黒く豊である。その豊艶な顔色との対比（コントラスト）で、病人の白い顔が一層痛々しく痩せ衰へて見えたのである。

病人は寝椅子（ソーファ）の上に身を起して、

「御多忙中を餘り長く御手間を願ふのもいかゞですから、前口上を略して直ぐ本題へ飛込みませう。保村さん、僕は今迄は幸福な身分でした。成功の途に向いてゐる男でした。それが、いよ〳〵結婚の間際といふところになつて突然に、一つの恐しい不幸が持上つて、生涯の凡ての希望を滅茶々々に壊して了ひました。

多分もう須賀原君から御聞き及びでせうが、僕は外務省に出勤し

てゐまして、叔父の堀戸春容卿の勢力のお蔭で昇進も速く、一足飛びに今の位置にまで登りました。殊に叔父が今度の内閣で外務大臣となりまして以來は、僕に種々の重大な使命を與へまして、それをまた僕がいつもア手際よく片附けたものですから、終には僕の技倆と氣轉とに絶大の信用をおくやうになつたのです。

「そこで、凡そ十週間ばかり以前でした――さうですね、詳しく申上げると、五月二十三日の事なんです――僕は叔父の室に呼ばれました。叔父は僕の此頃の手柄をいろ〳〵と讃めてくれた後に、實はもう一つ新たに重大な任務で頼み度いことがあると申しました。

叔父は書棲の抽出から、灰色の一巻の公文書を取出してさて申しますには、

「これは我が英國と伊太利との間の秘密條約文の原文である。遺憾なことにはこれに關する兎角の評判がもう新聞に載つたやうであるか、極めて大切なものであるで、その上の内容を新聞社などに漏らしたくないのぢや。佛蘭西と露西亞との大使は、この條約文を嗅ぎ知るためには、どのやうな莫大な金をも惜しまぬぢやらう。で、一分間もこの抽出を去らせるものではないのであるが、只こゝに止むを得ぬといふのは、この條約の全文を寫し取つておく必要があるの

おや。君は事務室に鍵を持つて居るだらうね。」

「ハイ、持つて居ります。」

「では此書類を持つて行つて錠をおろしておいたがよからう。そして君だけが少し後へ殘つて、一同の退出し切つたのを見計ふて悠くりと寫して貰ひ度い。すれば鋼み見られるといふ心配もない。で、いよ〳〵寫し終へたならば、原文と寫しの方とを再び書櫃へ入れて嚴重に錠をしてな、明日の朝君自身の手から私に渡して貰ひ度いのぢや。」

さういふ譯で、僕は書類を受取つて——。」

倪村君が口を出した。

「一寸お待ち下さい。外務大臣とのそのお話の間は、貴君お一人きりであつたらうか。」

「一人きりでした。」

「大きな室ですか。」

「縦横とも五間の室です。」

「その室の中央で御話しでしたか。」

「左樣、まづ中央の邊でした。」

「お聲は低い方で？」

「叔父の聲はいつも非常に低いのです。僕の方では殆ど口を開きませんでした。」

「有り難う。何卒お大きを。」

と保村君は眼を閉ぢた。

三　怪き階上の鈴の音……駭然騙上れば吓！

「僕は叔父から命令された通りにして、他の馬宮連の退けるのを待つてゐました。そのうちに僕の室の間僕も大抵去りましたが、只一人綾田といふ男が、少し仕殘した仕事があると申して殘つてゐましたから、僕は彼を殘して室外に出て、夕飯を喰ひに行きました。歸つて見ると綾田はもうゐない。そこで僕は急いで叔父の仕事に取り掛りました。と言ふのは、この千嘉子の兄——只今御覽になつたあの春藏君が、その日はやはり町へ出掛けて參つて、午後十一時の汽車で王琴町へ歸るのを知つてゐましたから、なるべくは僕もそれで一所に歸り度いと思つたからでした。

室へ戻つて條約文を讀んで見ると、成程頗る重大なものであつて叔父が極力秘密々々と申したのも決して誇張の言葉でないことが解りました。詳細のことは兎に角、一言にして申せば、それは三角

同盟に對する大英國の位置を定限したものなのです。そして地中海に於て佛國艦隊が、伊太利艦隊よりも絶對に優越機を占めた場合に處する我國の政策を豫定したものでありました。其中に取扱はれてる問題は皆、純粹の海軍に關する問題のみでしてね、最後に兩國君主の御署名がありました。僕は一通りズッと走り讀みに目を通してから、寫し取りに掛りました。

所がその文書と來ましたらば隨分長いもので、佛蘭西語で書かれた二十六個條から出來てゐますので、一生懸命にペンを走らせましたが、九時になつても漸く九個條を寫したばかり、豫定の汽車の時

間までには到底間に合ひさうもありません。そのうちに、食事の後と言ひ、終日の仕事の疲勞と言ひ、次第に睡くなつて茫然して參りました。こんな時に珈琲の一杯も飮んだらば頭腦が明瞭するかも知れぬ。一體役所では、階段の下の小さな室に小使が終夜殘つてゐましてね、時間外の仕事をする者には、アルコホルランプで珈琲をたてゝ持つて來る習慣になつてゐましたから、そこで鈴を鳴らして小使を呼びました。

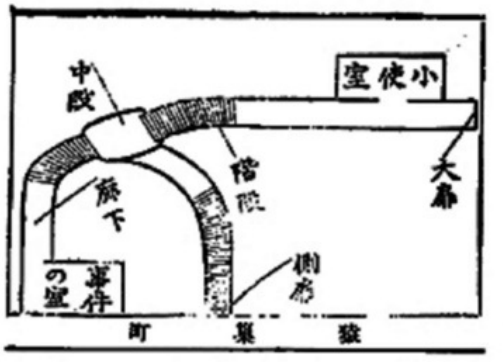
意外にも、鈴に應じて登つて參つたのは毎時の小使ではなく、前垂を掛けた一人の、下品な顏付をした、年齡の大女でした。聞けば

小使の女房で、役所で雑役をしてゐる女なんださうです。で、それへ珈琲をたてゝ来るやうに命令けました。

また二個條ばかり寫しましたが、ます〳〵睡くてたまらないので椅子から立上つて、脚を踏み伸ばすために室内をあちこちと歩き始めました。けれども珈琲がまだ来ない。チヨッ、何を愚圖々々してるんだらうなアと、僕は扉を明けて、小使室へ行くために廊下を進んで行きました。僕の働いてゐた室からは一條の廊下がズーと通じて、朦朧と燈火に照らされてゐます。僕の室からの出口はこれ一つだけなのです。それを通り越すと彎曲つた階級があつて、其降り壺したところが小使室に當つてゐました。このまた彎曲つた階段の中腹に小さな一つの中段があつて、そこへ直角に他のもう一つの廊下が抜けてゐます。この第二の廊下を傳ふてゆけば、同じく小さな階段があつて、その降り口は雇人共の出入の扉になつてゐます。もつとも、猿巢街の方から通ふ役人は、近路だと申して大抵その扉の方を通るやうでした。一寸略圖を書きませうか——斯うです。」

と律夫は千嘉子に紙片と鉛筆とを持つて来させて、挿繪のやうな略圖を描いて見せた。

『いや、これでお話が一層明瞭になります。』



と保村君が言つた。

『え、此構造の點を呑み込んでゐて下さることが非常に必要であります。で、僕は階段を降りて小使室に入つて見ますと、珈琲が來ないも道理、小使先生グッスリと居睡最中で傍にはアルコホル●ランプにかけた釜がグラ〳〵と煮立つて湯が沸きこぼれてゐるといふ有樣です。先生、僕が入つて行つても尙ほ知らずに睡りこけてゐる。そこで僕は手を伸ばして搖り起さうとしますと、丁度その時でした、頭の上で鈴がリン〳〵と鳴り出した、其音で小使はびつくりして初めて跳ね起きました。

「おや、栗瀬さんでございますか！」

とキヨロ〳〵と僕を眺めてゐますゆゑ。

「さうだよ、珈琲を頼んだけれども持つて來てくれないから取りに來たんだよ。」

「いや、申譯もございません、ツイ釜をかけたなり寢こけてしまひまして……。」

とまだ僕の顔を眺めてゐます。鈴はまだリン〳〵と鳴り續いてゐる其音を聞けば聞くほど小使の驚きは增して來ました。

「ハテ、不思議でございますね。貴君がこゝにゐらッしやるのに……誰が鈴を鳴らしてゐるのでございませう。」

「え、鈴かえ！　あの鈴はどこのだえ。」

「貴君が今迄お仕事をなすつてゐらしつたお室の鈴でございますよ。」

と言はれた時の僕の驚き、ハッとして思はず背中へ水をさゝれたやうな氣がしましたよ。あの大事な條約文がテーブルの上に乘つたまゝである。すると何者かその室へ入つて來たのだ……と思ふと僕は狂人のやうに階段を飛び上りました。併し保村さん、廊下には誰もゐないんです。室内にも人影がないんです。何處も彼處もチャンと元のまゝなんですが、たゞ書檯の上を見ると、例の大事の〳〵書類が乘つてゐない。寫しの方はありますが、正本の方は影も形もありません。」

保村岩は椅子から立上つて兩手を揉みだした。これは問題に油の乘つた時の證據である。

「それから何うなすつた。」

と呟く。

『僕には直ぐにかういふことが解りました、それは賊が今お話した第二の廊下の方から來たに違ひないといふことです。若し僕の通つた本廊下の方から忍び込んだものならば、僕と行き逢はぬ筈はありませんからな。』

『併し賊が以前から室内に潜んでゐたやうなことはありませんか。或はお話では廊下の燈火が甚だ暗かつたとのことであるが、その暗きを利用して廊下に隠れてゐたといふやうなこともありませんか。』

『それは絶對に不可能です。室でも廊下でも鼠一疋隠れることは出

來ません。兩方とも何の掩護もありませんもの。』

『成程、では次を伺ひませう。』

『僕が眞蒼になつて驅出したものですから、小使も何か椿事が起きたと思つて、二階へ續いて驅け上つて來ました。けれども二階はその通りの譯なんですから、二人はまたもや階段を飛び降つて、猿巢町へ向つた側廊下の方へ進みました。突當りの扉は閉まつてゐましたが、錠はおろしてない。我々はこれを蹴飛ばして往來へ走り出ました。僕は今でもはつきり覚えてゐますが、其時丁度近所の寺の鐘がカン〳〵と三つ鳴り渡りました。つまり九時十五分前の鐘で

すね。」

「それは極く大切な點ぢや。」

と保村君は襯衣のカッフの上へ控えを書いた。

「外へ出て見ると夜は暗く、温い微雨が降つてゐました。猿巣町には一人の人影もありません。たゞ例の通り大きな馬車が町端れの方へ消えるばかりでした。我々は帽子も被らず舗石の上を駈けて行きますと、遙かの角に一人の巡査を見付けました。

僕は息を喘々言はせながら、

「盗賊が入りました！　外務省から頗る重要な書類を盗み出した奴があるんですがね、誰か此道を通つた者はありませんか。」

すると巡査の曰くです、

「私は十五分ばかり前からこゝに立つてゐるんですが、其間にたゞ一人通つたゞけですよ――それは婦人でしてね、年寄つた大きな女で、黒い肩掛を掛けてゐた……。」

「あゝ、それや私の嬶です。」と小使が叫びました。「ほかには何奴も御見掛けになりませんでしたかね。」

「見掛けんかつたよ。」

「ぢや、盗賊め、他の道を逃げやがつたに違ひない。」

と言つて小使は僕の袖を引張るのです。

併し僕はどうも不満足でした。それに小使の奴が僕を無暗に他の道へ引張るのも却つて疑ひを増す種となりました。

「其女は何方へ行きましたらう。」

と巡査に訊きますと、

「知りません、たゞそんな女が通るなと思つたばかりで、無論特別に注意する氣も起らないですからな。兎に角急いではゐましたよ。」

「何れほど以前ですか。」

「なに、たつた今のことです。」

「五分ばかりですか。」

「なに、五分も經つてやしません。」

と言ふ問答を小使は悶かしげに、

「栗瀬さん、そんなつまらぬ事で隙を取つてゐらしつちや駄目ですよ、一分間でも大切な時ぢやございませんか。私ん處の婆さんが何でそんなことに關係があるものですか、そりや確ですよ。ですから早く他の方を捜しませう……え、貴君が行らツしやらなきや、私が行つて見ませう。」

と走り出して了ひました。

それを直様僕は退ひかけて捕まへました。

「お前の住居はどこか。」

「愛比町十六番地です。けれども栗瀬さん、そんな間違つた嫌疑はお止しなさいまし。それよりや、早く此方へ行つて何か手掛をつかまへませう。」

全く其通りですから、僕は巡査と一所に別の往來へ驅けて行きましたが、こゝはまた行き交ふ人や馬車で一パイ、何れも雨を厭つて家路に急ぐ者ばかりですから、何れが何うだか、さつぱり解りません。」

四　外交問題の危態……恐怖と絶望とで昏倒

栗瀬は尚も語をついで、

「それから我々は役所へ歸りました。そして階段や廊下を隈なく捜索しましたが何の効も有りませんでした。僕の室續きの廊下には、一種の柔かな油圍が敷きつめてありますから、靴跡などは直ぐ眼につかねばなりませんのが、どんなに仔細に檢査しても何の靴跡もないのです。」

「その晩は雨が降りませんでしたか。」

「七時頃から降り出しました。」

「すると、九時頃外から來た者の靴には無論泥濘がついて居らねばならぬわけであるが、小使の女房が何の跡も殘して行かなんだといふのは怪しな次第ぢやないですか。」

「いや、それは御道理の御質問です。其時は僕も同じ疑ひを抱いて見たんですか、調べて見ると、役所で雜役に使ふ女共は、小使室で皆靴をぬいで、上穿をつけることになつてゐたのでした。」

「ハヽア、さういふわけですか。すると結局、雨降りの晩であつたにも係らず、役所には何の怪しい靴跡もなかつたといふのですね。」

ふゝん、事件の連鎖が確に奇怪である。それからどうなすつた。」

「我々は室も檢査しました。併し秘密の扉といふやうなものは在る筈がありませんし、二つの窓は何れも地面から五六間の高さにあつて、二つとも內から閉められてあります。床はぎツしりと絨氈を張りつめてありますから、陷扉などは無論なく、天井は普通の白い塗料を使つたものなんです。ですから背類を盜んだ曲者は、階下の扉口から忍び入つたに違ひないといふことは、僕が首を賭けても斷言します。」

「鍵はどうですか。」

「役所には壁に据え付けの煙はございません。僕の室には一つのストーブがあるばかりでした。鈴の紐は、丁度僕の寝椅子の右手の邊へ電線から垂れ下つてゐます。誰にせよそれを鳴らすには、寝椅子の傍まで近寄らねばなりません。併し、苟も盗賊をしやうとするほどの者が、何でわざ〳〵鈴を鳴らす必要がありませう。實に不可思議千萬ぢやありませんか。」

「全く奇怪なお話ぢや。それから何うなすつたか。多分曲者が何か手掛を殘して行つたらうとお思ひで、室内を捜索しなすつたらうな——巻煙草の吸殻とか、手袋とか、又は女ならば頭の針とか、さういつたやうな物を。」

「いや、何一つ殘してゐませんでした。」

「匂ひはどうでしたか。」

「匂ひですか……そこ迄は氣がつきませんでした。」

「はア、斯のやうな事件にあつては、煙草の匂ひといふやうなものが極めて大切な手掛になるのですぞ。」

「私は元來煙草は一切吸ひませんから、若し匂ひが殘つてゐたならば直ぐに感ずる筈だと思ひます。絶對に何の手掛もありませんでした。只一つの明白な事實は、例の小使の女房が——お輪といふ名だま

うで——それが急いで役所を出たといふ事だけであります。小使に言はせると、もう時刻が時刻でしたから女房が急いで家へ帰るに不思議はないと辯解します。で、僕と巡査とは、犯人は何うしても お輪だと鑑定して、さて犯人が盗んだ書類の始末をつけぬうちに捕まつてしまふのが最上の策と考へました。

此時はもう警報が警視廳へ達したものですから、縁部といふ刑事が早速出張して参つて、非常に熱心に事件を擔當してくれることになりました。そこで縁部君と僕とは馬車を雇ふて、三十分もたゝぬうちに、愛比町の小使の家へ着きました。出て参つたのは一人の

若い娘で、これは お輪の長女であるさうです。阿母はまだ居らぬとの事ですから、我々は入口の室で待つことにしました。

十分も過ぎると、コツ〳〵と表扉を叩く音が聞えましたが、こゝで我々は飛んだ失策をしてしまひましてね、その責任は僕ですが、我々が扉を開けばよいのを、ツイ迂かりして娘に開かせてしまつたのです。すると娘の聲が聞えます「お母さん、先程からお二人の男の方が お母様を待つてゐますよ」其聲と等しく、廊下をパタ〳〵いふ靴音がし出したので、刑事は扉を押し開き、僕も續いて勝手の方へ駈け出して見ると、お輪はもうそこに立つてゐて、惡怯れぬ眼付

で我々をジロ〳〵と眺めたのですが、其うちに不意に僕の顔が解るとびつくりしましてね、

「おやまア、誰方かと思つたら、お役所の栗瀬様ではございませんか！」

と叫びました。

「オイ〳〵、一体誰と間違へて逃げ出さうとしたんだね。」

と刑事が申しますと、

「私はまた借金取とばかり思ひ込んで了つたんですよ。実はある商人との間に少しゴタ〳〵が起きてゐるものですからね。」

「いや、そんな言譯は止して貰はう。お前は外務省から大切な書類を盗み出して、それを何者かに賣り拂ふために急いで戻つて来たんだらう。此方にはさう信ずる理由がチヤンとあるんだ。さア、取調べをするから我々と一所に警視廳へ来い。」

と刑事が引張らうとする。辨解をする、行くまいとする……併し幾ら抵抗しても無駄でさア、とう〳〵馬車へ乘せられて、我々は小使の家を出ました。其前に念のため勝手を捜索してみました。殊に今の間に火にでも焚べてしまひはせぬかと、爐の中は特けても仔細に捜したのですが、それらしい紙片もなければ、燃え殘りの灰もあり

ませんでした。で、警視廳へ着きますと、お輪は直ぐ婦人檢査部の方へ廻されました。僕はその間實に不安の心持で煩悶しながら待つてゐたのですが、非類の行衛はどうしても解りませんでした。

茲に至つて初めて、自分の現在の地位の恐怖といふものが、其全力を擧げて心に迫るのを覺えました。それ迄は僕は活動してゐました。活動に紛れて精神が痲痺してゐました。なに、非類は苦もなく取り戻せるに違ひないとばかり信じ切つてゐたものですから、取り戻されなかつた日には果して如何なる椿事に立ち至るかといふ事は夢想だもしませんでした。所が絶望の淵に臨んだ其時になつて、初

めて現實的に自分の位置を顧るやうになつたのです。氣が付いてみれば、何といふ怖しいことでせう！　須賀原翁は知つてゐますが、僕は學校時代から神經質な感情ッぽい性情でした。僕は叔父の事を考へました。他の內閣の諸大臣の事を考へました。あゝ、自分は叔父へ恥辱を蒙らせた、自分自身でも恥辱を蒙つた、いや、自分に關係する種々の人に恥辱を蒙らせた、この大事件に對して、たとへ自分一人が犧牲となつたところで償てどうなるか。外交上の利害問題を危地に瀕せしむるやうな失策に對しては何の宥恕を乞ふ術もない。自分はもう破滅だ、世間に顏出しもならぬ絶望的の破滅である

もう何をどうしたのか一切夢中です。何でも一場の騒ぎを惹き起したには違ひないと思つてゐます。微に覚えてゐますが、大勢の役人が僕を取り巻いていろ〳〵に慰めてくれる。其中の一人は僕を停車場まで連れて行つて汽車に乗せたやうでした。そして僕の家までも同行してくれるつもりだつたでせうが、幸福と其時、僕の家の近所に住む原井といふ医師が同じ汽車で臨るところでしたから、医師が其者から僕を受取つて、随分親切に家まで連れて来てくれました。全く医師に遇つたのが天の祐けでしたよ。停車場でもつて僕は発作を起して了ひましてね、家へ着かないうちから、もう躁狂に陥つて

ゐましたんですもの。

さて其状態でいよ〳〵家へ着いた時の家人の騒ぎといふものは御推察を願ふよりほかありません。皆寝込んでゐたのが医師の呼鈴で起され、思ひがけぬ僕の躁狂を見た時は、可哀相に、この千嘉子も母も胸が潰れるばかりだつたさうです。そこで原井医師は、停車場で刑事から預らず聡いた事件の顛末を物語つたさうですが、併し家の者はそれで安心が行くわけがない、何れこれは長い病気になるだらうと申すので、千嘉子の兄はこの楽しい寝室から追はれて、此室は忽ち僕の病室と変つて了ひました。夫以来、保村さん、僕は実に

九週間といふもの、腦膜炎のために人事不省となつて寢て居たんです。この千嘉子と原井醫師との看護がなかつたならば、今頃かうして貴君方にお話する事も出來なかつたかも知れません。全く僕のやうな狂的發作では、どのやうな危い事をするかも知れませんから、實は千嘉子、夜は屢ひ君護婦が交代で看護してゐてくれた有様でした。其故かだん〳〵頭腦も明瞭して參りましたが、併し記憶がすつかり恢復したのは、漸くこの三日以前からなのです。時々はこのまゝいつ迄も前後不覺であり度いと念ふやうなことも有ります。所で記憶を恢復してから最先に僕のやつた事は、總部刑事へ手紙を出し

た事でした。すると刑事は早速訪ねて來てくれましたが、其報告によれば、爾來凡有る手段を採つたけれども、何の手掛も依然發見されない。小使夫婦も百方訊問したけれども、何等の光明も認められない。そこで警視廳の嫌疑は役所の屬官の綾田五郎君の上に掛りました。綾田君は今もお話しました通り、あの晩一番遲くまで殘つて仕事をしてゐた君なんです。嫌疑が掛つたわけは、第一、遲くまで殘つてゐた事、第二は同君の名が佛蘭西人の名であるといふ其二ケ條なんですが、實際のところ、僕は同君の退出を見屆けてから安心して寫しに取り掛つたのですからね。それから姓名のことは、同

君の家はゆくのー教徒（佛蘭西の耶蘇新教徒）である事はあるが、同情と慣例に於て英國民である事は、貴君方や僕なぞと變りはありません。ですから、綾田君は結局此事件には何の關係もない人なんです。しますると、保村さん、僕は最後の唯一の希望として貴君の御助力を乞ふよりほか有りません。若しその貴君にして尚ほ御力が及ばぬとあれば、僕の名譽と位置とはもう永久に失はれねばならぬ事になるのです。」

五　倫敦行の汽車の中……周密な推理と研究

長話に疲勞れて、病人は布團の上に頽然と沈み込んだ。それを見ると看護の千嘉子は、何やら興奮劑を一杯勸めるのであつた。保村君は沈默つたまゝで眼を後へ反り返らせ、眼を閉ぢてゐる其態度は知らぬ者には無頓着にも見えやうが、實はこれは岡君が一意專念になつた時の癖であることは、昵懇の手には能く解つてゐる。

やがて彼は口を開いた。

「いや、お話は至極明瞭で、其上格別お訊ね致す事もないが、只一つ最も大切なことが殘つて居る。貴君はさういふ特別な任務を托せられたといふ事を誰かにお打明けでもなすつたか。」

「誰にも話しません。」

「例へば、こゝに御居での千喜子さんにも。」

「話しません。叔父から命令けられてから、寫しに取り掛るまでの間に家へ歸つて參つたのではありませんもの。」

「貴君の御家族の誰かと、偶然に其時貴君に面會に行かれた樣な事もありませんか。」

「有りません。」

「御家族の方で外務省の內部の樣子を御存知の方がありますか。」

「え、、そりや一通りは皆な案內したことが有ります。」

「小使の身上については何か御存知かな。」

「彼が古い兵隊上りだといふほかは何も存しません。」

「聯隊は何處でしたらう。」

「それは、聞きましたよ——古留戶の守衛隊であつたとか言ひましたつけ。」

「有難う。縱部刑事からは尙ほ必ず詳細の事が聞かれるでせう。一體其筋の者は事實を集めるには妙を得てゐますよ、尤もそれを有利に使ひこなすとは限りませんがね。薔薇といふものは可愛いものですねL」

と保村君は、寢椅子の傍を通り越して、開け放つた窓際に歩み寄り鉢植の薔薇の垂頂れた莖を摑んで、深紅と青との美しい混合色を見下した。彼の性格の狀態としては、予にとつても誠に珍しい事だ。彼が天然物に對してこんな鋭い興味を感じてゐるところなぞはツイぞ見掛けたことがない。

『凡そ演繹法といふものは、宗教に於ける時ほど必要なことはないね。それは、世の理論家によつて正確な一科學として建設されることが出來る。我々は花を見る時ほど、神樣の仁慈を深く感ずることはない。其他の總ての事物、我々の力だとか、慾望だとか、食物だ

とかいふものは、我々の生存にとつては眞先に必要なものには遠ひないさ。けれどもこの薔薇の花は例外です。この香りだの色だのは人生の裝飾であつて、その必要條件ではない。この例外を與へるものはひとり仁慈である。だから我々は花から期待する事が多いといふことを私は繰返して言はうと思ふね。』

此論證中、栗瀨律夫と千嘉子とは驚駭と失望との表情をして保村君の顏を眺めてゐた。保村君は指の間に薔薇を挾んだまゝで恍乎と幻想に陷つて了つた。五六分間もさうしてゐると、千嘉子はとうとう堪まらなくなつたのか、

「保村先生、先生にはこの不思議を御解きになりまする御見込みが御つきで御座いませうか。」

と幾分不快を交へた聲で問ひかけた。

「あゝ、不思議ですかー」と急に現實の世界へ引き下ろされて斯う答へた。「左樣さ、此事件が非常に隱微な錯綜したものであるといふことは拒ひわけにゆきませんな。併しお約束は出來ます、私は事件を研究して見ませう、そして特別にこれはと思ふ事が有つたらば御知らせ致しませう。」

「何か手掛りの御心當りが御有りで御座いますか。」

「只今のお話で七つの手掛りは得ました。が、一々當つて見ねば其價値については早計に斷言申上げられません。」

「誰か嫌疑者がお有りで御座いませうか。」

「私は私自身疑ふのですが——。」

「何をで御座いますか。」

「餘り早く見込が立ち過ぎましたからな。」

「では倫敦へ行らしつて、その御見込みを御試め遊ばせな。」

「千嘉子さん、貴女の御忠告は非常に適切ぢや。」と保村君は今迄背を倚り掛けてゐた窓の扉から身を起して「須賀原君、やはりさうす

るよりほかはない。栗瀬さん、貴君は的の外れた希望に耽ることは不可ませんぞ。この事件は随分絡らかつたものですからね。」

「もう一度御目に掛るまでは僕は相變らず病人です。」

と律夫が叫んだ。

「なに、明日また同じ汽車で伺ひませう、或は餘り吉報を御土産にすることは出來ぬか知れませんが。」

「是非々々、來らしつて下さい。事件に對して何事かと遽ばれてゐるといふ事を知るだけでも氣が爽々とします。あ、それから僕は堀戸卿から手紙を受取りました。」

「ほオー　どのやうな事を申されたか。」

「叔父は冷かです、併し苛酷ではありません、それはつまり僕が大病人になつたせいだとは思ひます。手紙には繰返して、此事件が重大である事が述べてあります。それから斯ういふことが斷つてあります——無論僕の免職の意味でせうが——僕の健康が恢復して、この不幸を償ふ機會を持つまでは、僕の未來に向つては一歩も取れないといふことなんです。」

「成程、それは理性的の思慮ある御言葉ぢや。では須賀原君、御暇しやう。まだ〳〵市へ行つて澤山仕事をせねばならぬ。」

與瀬君が停車場まで馬車で送つて來てくれて、やがて我々は倫敦行きの汽車中にあつた。保村君は深き瞑想に打沈み、倉井乘換驛を過ぎてから漸く口を開いた。

「何の線にせよ、此樣な軌道の高い列車に乘つて、此樣な家を瞰下ろしながら倫敦へ入つて行くのは實に愉快なものぢやねえ。」

何を雜談を言つてるんだ。此邊の景色と來たら隨分辛苦しいぢやないか。併し彼は直ぐに說明して曰くだ。

「見給へ、蒼石の上に聳えてゐるあれらの一群の隔絕れた大きな建物を……まるで、鉛色の海の中にある煉瓦の島みたやうな建物を。」

「あれは公立小學校だよ。」

「君、あれは燈明臺だよ！　未來の狐狸だよ！　希望に滿ちた小さな種が何の爲にも一パイ滿ちてゐる。あの中からいまに賢い奴等が飛出すのだ。未來の良國民が飛出すのだ。ところで、あの栗瀨君は酒を飮むかね。」

「否、僕は下戶だと思つてゐるがね。」

「我輩もさうは思ふ。併し凡有る微細な事を勘定の中に入れる必要があるね。可哀相に、先生、自分から拔き差しならぬ深みへ陷つてしまつたのだ。そして我々がそれを首尾好く引張り上げられるか何

うかゝ問題ぢや。君は千嘉子について何う思ふよ。」

「なか〳〵確乎した令嬢だね。」

「さうさ、併し性質は善良だよ、さうでなかつたら我輩の見損ひだけれどもね。あの兄妹は諾撒波府近の或る製鐵商の子だ。律夫君は去年の冬旅行中にあの令嬢と婚約した結果、千嘉子は彼の家族に紹介されるために、兄に扶けられてあの家へやつて來たのだね。ところが今度の災難が突發したので、其まゝ留まつて熱人を看護することになつた。兄の春藏もツイ居心地がいゝものだから同じく居座はつて了つたのだ。我輩は特別にそれだけの種を探つたよ。今日は兎に角研究の日として働かなけりやならね。」

「僕は――。」

「あゝ、君の方にこれより面白い事件があるならば――。」

と保村君は稍や不平さうな聲で言つた。

「いや、僕の言はうと思つたのはね、今は一年中一番閑暇な時だから、一日二日は思ふさま僕もこの事件に奔走出來るといふことなのさ。」

「あゝ、それは好都合ぢや。」と御機嫌が直つた。「では一所に研究して見やう。先づ手始めに繰部探偵に面會するのぢやね。多分思ひ通

りの詳細なことが聞かれるだらうから、そしたら何の方面から事件に接近して行つたら好いかも解るだらう。」

「君は手掛りが見付かつたと言つたね。」

「それは幾つもある。が、其價値は今後の取調べの結果に待たねばならぬ。犯罪中でその痕を辿るのに一番困難なのは、見込の立たない奴であるが、今度の事件は見込が立たぬ事はない。今度の事件で利益を受くる者は誰であらう……と考へて見ると、佛國大使もある露國大使もある、其何れかへ密書を賣り渡す者も利益を受くる。それからまた堀戸春容卿である。」

「堀戸卿！」

「ささ、斯ういふ事は考へられるだらう——それは政治家が此様な位置に身をおくことが出來る。此様な位置といふのは、今度の如き密書が偶然に破毀されても格別痛痒を感ぜぬやうな位置にあることぢや。」

「併し、堀戸卿のやうな名譽を擔ふてゐる政治家はまさか。」

「まア、さういふ事もあるといふだけぢや。けれども我々は全然それを度外視することは出來ぬよ。今日は外務大臣にも面會して、何か新事實があるか何うか當つてみやう。兎に角我輩はもう探索を始

めたよ。」

「最早？」

「うム、王琴停車場から都下の各夕刊新聞へ電報を打つておいたから、何れにもかういふ廣告が現はれることだらう。」

と手帳の引き裂いた紙片を手に渡す。それには鉛筆で次のやうな文句が走り書きしてある——

懸賞廣告

去る五月二十三日夜、十時十分前頃、外務省の猿巣町に向へる扉の前に、或はその附近に乘客を降ろせる馬車の番號を求む。御存知の人は久良瀬町二百二十一番舘に御報告を乞ふ。二十圓の謝禮を呈す。

「すると君は、賊が馬車で來たと信ずるのだね。」

「馬車で來ないとしたところで元々さ。併しぢやね、室にも廊下にも隱れ場所がないといふ粟瀬君の證言を事實とすれば、賊は外部から入つたものに相違ない。然るにぢや、あの雨降りの夜に外部から來たにも係らず、盜難の直ぐ後で調べた床の油繪に何の泥跡もつい

てゐないとしたならば、賊が馬車で來たとよりほか思はれぬではないか。さうだ、たしかに馬車といふ推察は當つて居ると思ふ。」

「さう言はれゝばさうらしいね。」

「我輩の言ふた手掛の一つはそれさ。其手掛からまた他の手掛が引き出せるだらう。それから次には無論鈴の問題がある——これが事件中での一番異彩のある疑問だが、一體何故鈴が鳴るやうなことになつたのだらう。賊が大膽不敵の餘りに鳴らしたのであらうか。それとも賊以外に何者かゐて、犯罪を遂げるために鳴らしたのであらうか。でなくば偶然にか。いや、ひよッとすると——。」

と言ひ掛けて、再び熱心な瞑想の境に沈んでしまつた。が、彼の一擧一動の意味を知悉してゐる予には能く解る——何等かの新しい光明が彼の心に射し込んだに違ひない。

六　警視廳と外務省へ……大臣の顏が颯と曇つた

倫敦の終端驛へ着いたのは午後三時二十分であつた。飮食場で急しく小晝を濟ましてから、眞直に警視廳へと押し掛けた。縱部探偵には保村君が既に電報を打つておいたので、彼は我々の來訪を待ち受けてゐた。小柄の敏捷さうな男で、愛嬌氣などは微塵もない說

い表情をしてゐる。我々に對する態度が明かに冷かなもので、殊に用向きを聞き取つてからはそれが甚かつた。

『保村さん、貴君の方法は伺つて承知してゐます。』と彼は險呑に言つた。『貴君は警察官の集める凡ての報告をいつでも御使用なさるだけの用意をしてお居でなさる。それから御自分で事件を解決して了つて、前の報告をば悉く不信用にさせるといふなさり方でせう。』

『ところが反對にです、過去に私の取り扱ふた五十三件のうちで、私が名前を出して居るのは僅た四件に過ぎなくて、他の四十九件といふものは皆警察官の御手柄としてあるくらゐです。貴君はまだ御若くて御經驗も積まれぬから、その事情を御存知ないのも御もつともぢや。ですが貴君が今度の事件に成功を期せらるゝならば、私と一所に御働きなさるのが肝要で、私に反對なすつては御爲めになりませんぞ。』

言はれて探偵の態度が大分柔いだ。

『願くは一二點、心得になる事を承り度いものですな。今度の事件ばかりは何の見込みもまだ立ちません。』

『何のやうな手段を御取りでしたか。』

『小使の丹造を探偵して見ました。彼奴が好成績で除隊になつた事

は確で、他に格別怪しむべき點もありません。が、女房のお輪といふ奴は強者ですな。存外この事件についても知つてゐる事があるはせぬかと私は睨んでゐます。」

「お輪は探偵して見なすつたか。」

「女探偵を一人放つて見ました。お輪は酒を飲みますね。其他にどうも餘り婆御を得ませんでしてな。」

「借金取に迫られたとかいふではないですか。」

「さうです、けれども勘定は濟みました。」

「金は何處から手に入れたでせう。」

「其御不審は御無用です。恩給金を丁度それに宛てたやうです、格別財產が有りさうな樣子も有りませんから。」

「栗瀨が珈琲を欲しいとて鈴を鳴らしたらばあの女が二階へ登つて行つたさうぢやが、その理由については何と申してゐますか。」

「亭主が大層疲勞れてゐたから、骨休めをさせやうと思つて代つたのださうです。」

「成程、間もなく栗瀨が降りて見ると、亭主は小使室で居睡をして居つたさうぢやから、其申立ては眞實かも知れぬ。してみると、お輪の性質以外に、彼等についてもう不審の點も無かりさうですな。

あの晩お輪が何故急いで歸つたか御訊きでしたか。その忙しさうな歩調が巡査の眼にも觸れたさうぢやが。」

「毎時より時間が遲れたので家へ急いだと申立てました。」

「貴君と栗瀬とは少くも二十分は遲れてお輪の後を追ひ掛けたでせう。その貴君方が何でお輪よりも先きへ行き着いたか、其點は如何です。」

「乘合馬車と二輪馬車とでは速力が違ふと申すのです。」

「では、家へ着くと、裏口の勝手の方へ驅けて行つた譯は？」

「借金取に拂ふべき金を勝手に藏つておいたからださうです。」

「何れにも辻褄の合ふた答へはなし居るな。お輪が役所を出際に若しや猿巢町で何者かに逢はなんだか、或は其邊をブラ〳〵してる者を見掛けなんだか、それを御訊でしたらうか。」

「巡査のほかは誰も見掛けなかつたやうですな。」

「フム、貴君の御訊問に御手落はなさゝうぢや。そのほか何のやな手段を御取りなすつたらう。」

「屬官の綾田五郎をこの九週間の間張偵して見ました、が、何のもなかつたのです。」

「その後か？」

「いや、もう何にも有りません——何の證據も手に入りません。」

「あの鈴が鳴つた原因については何か御考へが有りますか。」

「いや、實際を申すとあれには弱りましたよ。何れにせよ、彼室へ忍び込んで、わざ〳〵警報を與へるといふのは大膽極まる所業ですな。」

「さうです、變つたやりかたです。いや、色々お話下すつて有難う。若し賊を御手渡しする事が出來たらば、其際はまた我輩の實驗をお話しませう。須賀原君、失禮しやう！」

「今度は何處へ行くね。」

警視廳の門を出ると予が訊ねた。

「現內閣外務大臣にして未來の英國總理大臣たる堀戸將容卿を訪問するのさ。」

大臣は都合好く尚ほ役所を退出せずにゐた。保村君が刺を通ずると直ちに引見された。彼は彼特有の荷式の態法を以て我々に應接した。そして暖爐の兩側に据ゑた二脚の贅澤な安樂椅子に我々を掛けさせた。主人は我々の間に立つてゐる。華車なスラリとした體格、嚴格にして思慮有りげなる顏付、既に霜を交へた縮毛、打見たところ眞の貴族らしき風采の貴族である。

大臣は微笑みながら、

「保村さん、貴君の御噂さは能く承つて居る。無論貴君の御來訪の目的を私が存ぜぬと白を切るわけではない。實に役所始まつて以來初めて貴君の御注意を惹くやうな事件が起りました。失禮ぢやが貴君は誰のために御働きになつて居られますか。」

「栗瀬律夫君のために骨折つてゐます。」

と保村君が答へた。

「あゝ、不幸な甥のためにですか——貴君はお解りですか——彼が一族一門たるが故に、何の途からも彼を庇よといふことが私には致し惡い。今回の事件は彼の前途のために甚だ不利益な結果を齎すに違ひない、それが殘念であるのです。」

「併し書類が發見されましたらば？」

「あゝ、無論その晩には問題が違ふて來る。」

「閣下、私は一二點御訊ね致し度いことが有るのですが。」

「知つとる限りは悦んで御答へしませう。」

「條約文の筆寫について閣下が御命令を御與へになりましたのは此御室で御座いますか。」

「左樣。」

『では他人に聽かれる心配はなかつたので御座いますな。』

「仰有るまでもなく。」

「條約文を筆寫させる意志が御有りだと申すことを守て誰方かに御洩らしでもなさいましたか。」

「決して洩らしません。」

「確に左樣で御座いますか。」

「確です。」

「はア、閣下も御洩らしにならぬ、栗瀬君も秘密をぐられた、他に誰方も御存知の方がないとしますれば、栗瀬君の室に賊が入つたのは全く偶然であつたので御座いますな。偶然に好機會に觸れた、それで持ち出した、と斯ういふ事になるので御座いますな。」

大臣はまた微笑んだ。

『其邊は私の領分以外の事に屬しますヲ。』

保村君は一寸考へてから、

『もう一つ御意見を御伺ひせねばならぬ大切な件が御座います。其條約文の內容が他に洩れたる曉には非常な重大な結果が生じて參る、それを閣下には多分御心配で御座いましたらう。』

暗い影が大臣の特色ある顏を俄と曇らせた。

『全く、非常な重大な結果が起きますな。』

『その結果が既に現はれましたらうか。』

『さだです。』

『例へばですな、それが佛國或は露國の外務省の手に入つたとしますると、自然閣下にはお解りで御座いませうな。』

『解りませう。』

と大臣は顰め面をした。

『併し約十週間を經たる今日、未だ何の情狀にも接せぬのを以て見ますれば、條約文は何等かの理由の下に敵の手に達しなかつた、さう考へても不穩當では御座いますまいな。』

堀戸卿は肩を聳かした。

『だが、保村さん、賊はまさかに條約文へ枠をつけて懸けておく爲めに盜みはしますまい。』

『一段と高値のつくのを待つてゐるのではありますまいか。』

『もう少し待つて居るうちには恐らく虻蜂取らずになつて了ふでせう。あの條約文は數ケ月以後には最早秘密ではなくなりますからな。』

『それは最も大切な點です。無論賊が急病に罹つたなどといふこと

も有り得べき事ですから――。」

『例へば腦膜炎に罹るといふやうな場合ですか。』

と大臣は暫乎と保村君の顔へ流眄をくれて言つた。

『いや、さうは申上げません。』と保村君は落着いたもので『所で、閣下の御多忙の時間を大層御邪魔致しました。それでは御暇致します。』

『賊は何者であらうとも、貴君の御捜索の成功を祈ります。』

別れて出て来ると保村君はかう言つた。

『大臣は立派な男だ。併し先生、現在の位置に喰りつき主義を取つてゐるね。餘り金持でないのに、招待などが澤山有る。無論君は大臣の靴の底が二度も修繕されたのに氣が付いたらうね。さてと、須賀原君、今日はあの新聞廣告に返事のない限りはもう爲るべき事もないから、此上君の御邪魔をするには當らなくなつた。が、明日また今日と同じ時刻の列車で、一所に王寧町へ行つて貰はれると非常に好都合ぢやがねえ。』

『お安いことだ。ぢや明日また會はう。』

七　兇器を持た深夜の曲物……保村探偵苦肉の策

此約束に從ひ、翌朝はまた保村君と王琴町へ出掛けた。昨日の廣告に對しては未だ何處からも反響がない、事件の上には何等の新しき光明も投げられてゐないさうだ。

栗瀬律夫は相變らず戀人の看護の下に寢て居つた。が、昨日よりは餘程快いらしい。我々の姿を見ると起上つて來て、左程難儀でもなさゝうに我々に挨拶した。

『何か望みがございましたか。保村さん。』

と熱心に訊いた。

『昨日御斷はりした通り、私の報告は消極的のものですぞ。私は縱

令刑事とも命ひました、堀戸卿にも御目に掛つた、そして一二個條取調べの端緒を開いて參つたが、これは何等かの結果を得るかも知れません。』

『では、全然御失望ではなかつたのですな。』

『失望ではないですとも。』

『まア、さう承つて安心致しましたー』と千嘉子が叫んだ。『それならば勇氣を出して辛棒さへ致して居りましたらば、きつと明りの立つ時も參りますわ。』

『今日は貴君の御報告よりも、却て此方から御話せねばならぬ事が

ありません。」

と、律夫は再び寝椅子に腰をおろして言つた。

「いや、何か變つた事があればいゝとは念ふて居つたのです。」

「え、、昨夜一樁事がありました、而も容易ならぬ事なんです。」といふ顔の表情が甚く厳肅になり、眼には恐怖と言つたやうな色が閃き出した。「保村さん、僕はかういふ事を信じ初めました——僕は知らず識らずのうちに、或恐るべき徒黨の中心點になつてゐたんです。な、そして僕の名譽と共に僕の生命までも的はれてゐるといふことなんです。」

「ほオ！」

「元來僕は此世に敵といふものを持つてゐないと自信してゐますから、さういふことは甚だ不條理のやうに即えるのですが、併し昨夜の出來事から見ますれば、どうも然う推測するよりほかはありませんん。」

「承りませう。」

「先づかういふ事を御承知が願ひたいのです、それは昨夜初めて僕が看護婦なしに此室に寢たといふ事なのです。僕は全く一人で妨末の出來るほど具合が快くなつてゐました。併し終夜燈火だけは點け

てゐました。何でも朝の二時頃でしたかね、トロ〳〵としたと思ふと、不意に微な物音のために眼が醒まされました。丁度、鼠が板でも噛むやうな音でしてね、僕はそれに違ひないと思つて、しばらくぢッと聴いてゐたんですが、其音が次第に高まつて来る、そして突然に窓のところから物を剪み切るやうな鋭い金属性の音が聞えて来ました。僕はびッくりして起き直りましたよ。的さり何の音だか解りました。微な音は、曲者が道具を窓框の間の隙間へと挟した音なんで、それから鋭く響いたのは、鍔を押しのけた時の音なんです。

すると、やゝ十分間ばかりは音がピタリと止みました。これは僕

が眼が醒めたかどうかを覗ふ為でしたらう。そのうちにギーといふ柔かな軋みと共に、窓がソロ〳〵と明けられた様子ですから、平とは違ひ、病後の神経が鋭敏になつてゐる僕が、もう堪まらなくりました。で、寝巻から飛び降りて、窓の扉を颯と明けました。して一人の曲者が窓に蹲ばッてゐる、が、電光のやうに逃げ出しものですから、人相も何も弁別けられませんでしたが、何でも翁やうなものを繩つて顔の半分を隠してゐるやうでした。只一つ見めた事は、曲者が手に兇器を握つてゐたことで、これだけは確です長い小刀のやうでしてね、身を反はして逃げ出す時にキラリと光

たのが見えましたよ。」

「それは非常な椿事ぢや。して何うなすつたか。」

「僕が健康の時でしたらば、窓を飛び越して追跡するところなんですが、病後の今ではさうもなりませんから、早速鈴を鳴らして家の者を起しました。けれどもそれが可成手間が取れました、と申すのは、鈴は寝所の方へ通じてゐるのに、雇人共は皆二階に寝てゐるといふ譯ですから、そこで僕は大聲に喚き立てたですな。すると義兄の森藏君が飛んで來て、それから他の者を起しました。森藏君と下男たちが外を調べて見ると、窓下の花壇に足跡がついてゐる。が、

此頃の乾き切つた氣候でしたから、至極朦朧としてゐて、草塲の中に消えたのを突き留めることが出來ません。併し、往來をグルリと境してゐる木造の柵に一個所、曲者が乘り越えたと見えて柵の頭が折れてゐる所がありましたさうです。此事はまだ警察へも屆けませんん。實先に貴君の御意見を伺はうと思つてゐたものですから。」

此話は保村君の心に異常の結果を齎したらしい。彼は椅子から立上つて、靜止として居られぬと言つた風に室内を歩き出した。

「災難といふものは一度で濟まぬものですな。」

と律夫が言つた。微笑みながら言つたのだが、昨夜の一件でやゝ怯

えてゐるのは明白である。と、保村君は、

「たしかに御災難であつた。貴君は私と一所に御宅の周圍を巡られますか。」

「え、、巡られますとも。少しは日光に當つた方が好いんです。春藏君も御供するでせう。」

「私もよ。」

と千嘉子が言つた。

「いや、貴女は御出でなさらぬ方が宜しい。」と保村君は頭を振つて

「貴女はそこに其儘靜止としてゐらしつて頂きたいのです。」

若い令嬢は不滿足げに再び腰を下ろした。が、兄は一行に加はり斯て我々四人は庭へ降りた。芝生を廻つて律尖の窓下へ行つて見ると、彼の話にあつた通り、花壇の中に足跡がついてゐるが、殘念ながらぼんやりと滲汚れてゐるのみである。保村君は一寸其上に屈みこんだが、直ぐに身を起して、

「私は、賊が入つたにしては斯やうなことのあるべき道理がないと思ふ。まア邸を巡つて見たら、なぜ特別に貴君のこの窓が目指されたか解るでせう。一體ならばあの客室や食堂の大きな窓の方が、餘計に賊の眼を惹きさうなものであるのに。」

「あれらの窓の方が往來から一層見え易いですな。」

と春藏が言つた。

「え、さうです、無論です。あゝ、こゝにも賊が當つて見たらしい扉がありますね。これは何ですか。」

「御用聞きの出入口です。無論夜は鎖めておきます。」

「栗瀨さん、以前にも昨夜のやうなことがありましたか。」

「決して有りません、初回です。」

「お宅の中に伸金とか、其他何なりとも賊の眼をつけさうなものがありますか。」

「そんな貴重な物は置いておきません。」

保村君は兩のポケットに手を突込んだなりで、邸宅の周圍をブラ〳〵巡つて歩いた。こんな亂次のない姿勢は彼にとつては珍らしいことである。

「時に……」と春藏を呼び掛けて「賊が棚を乘り越えたところは多分解つて御居でせうな。一寸拜見したいものですが。」

春藏に導かれた木棚の一個所は、成程棒の端が折れて、その折れたのがブラ〳〵と下がつてゐる。保村君はそれを引きむしつて仔細に檢べて見た。

『これが昨夜の仕業でせうか。何だか古く見えるぢやないですか。』

『さうですなア。』

『それに、向ふ側に人間の飛び降りた跡がない。いや、どうも何の手掛りもなさゝうです。寝室へ戻つて御相談致さうぢやありませんか。』

律夫は未來の義兄の腕に凭れて、極くノロ〳〵と歩いて來る。保村君は歩早に芝生を横切り、斯くて我々は遅れた二人よりもずッと先きに再び病室の窓際に腰掛けてゐた。

『千嘉子さん。』と保村君は頗る熱心な態度で呼び掛けた。『貴女は今日一日そのまゝ其處に靜止としてゐらッしやらなければ不可ませんぞ。何事があつても今日だけは其場所を御動きになつてはなりませんぞ。さうなすつて頂くことが非常に必要になつて參つたのですからな。』

『お案みなれば御言葉通りに致します。』

と令嬢は思ひ惑ひながら答へた。

『で、御寢みになる時には此室の扉に錠をお掛けになつて、鍵をば御放しなさるな。宜しいか、御約束しましたぞ。』

『けれども、律夫様は？』

「栗瀬君は我々と倫敦へ行かれるのです。」

「私だけこゝに殘るのて御座いますか。」

「さうなさるのは栗瀬君の爲めです。貴女が同君のために御役にたつ機が來ました！　早く！　宜しいか！」

千嘉子が首肯く其折しも、遲れた二人が入つて來た。

「千嘉子、なぜそんなに驚いた顏をして引込んてゐるんだね。」と兄が聲掛けた。「ちつと庭へでも出ておいで、好い天氣だよ！」

「いえね、兄樣、私少し頭痛がしますのよ。このお室が却つて涼しくて心地が快うございますわ。」

「ところで保村さん、御意見は如何でせう。」

と律夫が促した。

「いや、此樣な些細なことの取調べのために、肝心の例の問題を怠けてはなりません。どうです、貴君が我々と一所に倫敦へ行つて下さると大層好都合ですがね。」

「直ぐにですか。」

「まア御都合のつき次第、左樣、一時間ばかりのうちに。」

「僕の御供するのがそんなに御必要ならば參りませう、體は大丈夫らしいのです。」

『非常に必要です。』

『今晩はあちらに泊らねばなりますまいな。』

『今それを申さうと思ふたところです。』

『すると、昨夜の先生がまたやつて來ても、肝心の僕が藥抜けの殻なのでオヤ〳〵といふことになるんですな、萬事お任せします。其の代り保村さん、貴君の御計畫も伺ひ度いものですな。それから、春藏君が一所に行かれると僕の世話が賴まれますが、宜しいでせうな。』

『いや、それには及ばぬでせう。御承知の通り須賀原君が醫師ぢやから、貴君に對する御注意は充分してあげられます。では御宅で一つ小盞を御馳走になつて、それから三人して御一所に出掛くるとしませう。』

八　皿を凝視めてアッと一聲……妻を取つた其瞬間

萬事が保村君の希望通りに按配された。予には同君が此樣な處置を取る眞意が解らぬ。或は令孃を律夫から遠ざける策でもあらうかさて我々は、健康の恢復と活動の喜悦に滿たされた律夫と共に食堂にて食事を共にした後邸宅を出掛けたが、こゝにもう一つ意外な目

に遇はされた、と言ふのは、停車場へ着いて、客車の中へ腰を降ろした我々兩人に向つて、保村君は平氣な顏で、自分は倫敦へ行く意志がないと言ひ出したことである。

「實はね、倫敦へ歸る前に、もう一つ二つ研究し度いと思ふ小問題が殘つて居るのだ。栗瀨さん、貴君の御不在になるのは私にとつて却つて幸福ですぞ。須賀原君、倫敦へ着いたらば直ぐにお客さんを私の家へ御連れして、私の行くまで御止めしておいてくれ給へ。兩君は古い學友ださうぢやから、話が合ふて丁度宜しからう。栗瀨さんさういふ次第ぢやから今晩は我々の豫備の寢室に御寢み下さい。朝の八時にはうおーたーるー停車場に着く汽車がありますから、明日の朝飯迄にはまた御目に掛りませう。」

「ですが、倫敦での例の問題の取調べはどうなりませう。」

と律夫は心細げに訊いた。

「それは明日出來ます。只今のところは私は此方に留る方が一層大切なのです。」

「では宅の者に、明日の晩は歸り度いと思ふて居ると お傳げ下さい。」

汽車が動き出すと律夫がかう言つた。

「いや、お宅まで歸るかどうか解らない。」

と保村君は、走り出した汽車に向つて愉快げに手を振つた。

予等兩人は倫敦の保村君の事務所に着くまで、この新しい發展について噂しあふたが、何れも滿足した理由を發見することが出來なかつた。

「僕の想像では保村さんは昨夜の强盜について何か證據を見付けやうとして居られるのではないだらうか。まア强盜だらうね、僕自身では、どうしてもあれが普通の竊盜とは思はれない。」

と栗瀨が言つた。

「すると君の考へはどうなのかね。」

「君は屹度僕の衰弱した神經の故にするだらうが、僕の信ずる所によれば、或る深い政治上の陰謀が僕の周圍に企てられて居る。そしてどうも其徒黨等が僕の生命を的つてゐるらしく思はれるのだ。或は僕の言葉は誇大に響くかも知れん。不條理に響くかも知れん。けれどもまア事實を考へて見てくれ給へ！　何の目ぼしい物もない寢室の窓から、何で竊盜が忍ひ込む必要があるだらう。何で手に長い小刀を握つて來る必要があるだらう。」

「押込の鐵挺かなぞぢやなかつたのかね。」

「なアに、小刀だつたよ。其刃がキラリと閃るのを僕は判然と見たんだもの。」

「併しだね、君がなぜそんな怨みを受けてゐるのだらう、怪しいぢやないか。」

「あゝ、それが疑問なんだ！」

「兎に角、保村君も同意見とすれば、行爲に現はれるから解らうぢやないか。假りに君の意見を正當だとして、彼が昨夜君を脅かした奴に手を下す事が出來るとすれば、百尺竿頭一歩を進めて、海軍條約文を竊んだ奴をも見付けるに違ひない。一方は君から條約文を竊

ひ、一方は君の生命を脅す——そんな二つの敵を君が持つなどと考へるのは不條理だよ。」

「だが、保村君は僕の宅迄は戻らぬかも知れんと言ふたぜ。」

「僕は長い事知つてゐるが、保村君がしツかりした理由なしに沒然と働くといふことは曾てないね。」

兎角して漸く我々の話は他の問題に移つたものゝ、予に取つては實に退屈の一日であつた。栗瀬は長らくの病氣の後とて未だ衰弱してゐる上に、重なる不幸で憂鬱ッぽくなり、神經質になつてゐる。予はあゝがにすたんの話、印度の話、世間話、何にてもあれ彼の心

を紛らすやうな事を話して聞かせたのだが效目がない。彼の心は常に失はれた條約文の上へ後戻りをする。保村君の行動やら、堀戸卿の執りつゝある手段やら、明朝接すべき報告やらについて或は訝み或は想像し、或は推測する。夕暮になるにつれ彼の亢奮狀態は全く傷しくなつた。

「君は保村さんを全然信用してゐるのかね。」

と、そんな事も訊く。

「素晴らしい探偵をやつた實例を幾つも見たからね。」

「けれども今度のやうなむづかしい事件を解決したことはないだら

う。」

「なアに、君の事件などよりはズッと手掛りの少い難問題を美事にやつてのけた事は澤山あるよ。」

「併し今度のやうな國家的の利害に大關係のあるものではなかつたらう。」

「それは知らんがね、僕が確に覺えてゐるのでは、非常な重大事件で、歐洲の三つの皇室のために働いた事がある。」

「兎に角、須賀原君、君は保村さんを能く知つてゐるのだが、あのくらゐ不可思儀千萬な人も見たことがないね。まるで僕等には見當

がつかない人だ。君は今度も有望と思ふかね。先生自身は成功を期してゐるだらうかね。」

「保村君は何とも言はなかつたよ。」

「ちやア形勢は悪いのだね。」

「いや反對だ。僕の經驗によると、保村君は的を外れた時には外れたと言ふ。むッつゝ默りこんだ時には喰ぎ當てた時なのだ。それが果して正確であるや否やがまだ不明な時なのだ。それはさうとしてだね、君、こんなことで御互に神經ッぽくなつてゐるのはもう堪まらんから、後生だから寢てくれないか。寢れば氣分が新鮮するよ。

そして明朝の吉報を待つことにしやうぢやないか。」

漸との事で說き付けて寢かせる事にした。かう亢奮してゐるのでは到底安眠は出來ないとは知れてゐれど、さうするよりほかに仕方がない。彼の神經質はとう〳〵予にも傳染した。予も殆ど半夜といふものは、轉輾反側して、此怪事件の上に思ひを馳せたり、あれか、これかと無數の理窟を捏ね返してみたり、その理窟が後のになるほど段々前のゝよりも出來ない相談になつたりなぞして夜を更かした一體保村君は何だつて王琴町に踏み留まつたのだらう。何だつて千嘉子孃に終日病室に靜止としてゐるやうになぞと注文したのだらう

何だつて栗瀬家の近所に留まりながら、用心してその家族にも告げまいとしたのだらう。さういふやうな凡有る疑問を解決すべき說明をどうかして求めやう〳〵と瞑想を絞つてゐるうちに、とう〳〵ぐッすりと睡眠に陷ちてしまつた。

翌朝起きたのは七時であつた。起きると直ぐに栗瀬の室へ行つて見ると、友は寢が足りなかつた後の事とてぐッたりと憊悴してゐた そして彼は眞先きに保村君が歸つたかと訊いた。

『約束した以上、先生は一分間の遲速もなくやつて來るよ。』

全く予の言葉通りだつた。八時を打つと間もなく、一臺の馬車が

扉口に驅けて來て、保村君が飛下りた。窓から眺めてゐると、彼は左の手に繃帶を施してゐる。そして大層物凄い蒼白めた顏色をしてゐる。で、玄關を入つたと思つたが、やゝしばらくしてから階段を上つて來る音。

『まるで敗北した人のやうに見えるね。』

と栗瀬も叫んだ。

予もその言葉を是認せぬわけにはゆかなくなつた。

『結局、手掛りは倫敦の方にあるんだらう。』

と言ふと栗瀬は瞼を閉して、

「何處にあるものやら知らないけれど、先生が歸つて來たらば吉報が聞かれるだらうと待ち焦れてゐたのになア。併したしかに昨日までは左の手があんなに繃帶はしてなかつたよ。どうしたと言ふんだらう。」

「保村君、怪我をしたのかね。」

室へ姿を現はしたのを見ると予はかう訊ねた。

「や、これはなに、拙なことをやつて一寸引つ掻いたのさ。」と、御早うの挨拶代りを首でやつて見せて「栗瀬さん、貴君の今度の事件は、確に私が今迄從事したもの〳〵うちでも最も厄介なもの〳〵一つですね。」

「若しや御手に餘つたんぢやないかと心配しました。」

「いや實に素的な經驗をやりました。」

「その繃帶で見ると何か冒險的の事件があつたね。」と予が言つた。

「その顚末を聞かしてくれ給へ。」

「朝飯の後にしやう。なにしろ我輩は今朝のうちに三十哩を飛んで來たんだからね。例の馬車についての廣告には何處からも返事がなかつたらう。好し〳〵、さう毎時々々都合よくはゆかないものぢやア。」

食卓の用意は出來た。予が鈴を鳴らさうとするところへ、丁度女中のお陸さんが茶と珈琲とを持つて入つて來た。それから五六分も過ぎると料理を運んで來た。我々は皆食卓に就いた。保村君はがつ〳〵してゐるし、予は好奇心に滿ちてゐるし、栗瀬に至つては此上なしの不景氣の顏をしてゐる。

「お陸もなか〳〵臨機應變をやり居るわい。」

とカレー料理の雞鷄の皿の覆ひを取りながら保村君が言つた。「彼女の料理の範圍は少し狹いことは狹いが、朝飯だけは兎に角うまく喰はせるね、須賀原君、君のは何だ。」

「豚肉と鷄卵だよ。」

「うまいねー　栗瀬さん、貴君は何をお喰りか。カレーの鷄か、鷄卵か、それとも好きなものを御撰みかな。」

「有難う、僕は何にも喰べられません。」

「そんなことがあるもんぢやないー　さア貴君の前にあるのをお喰りなさい。」

「有難う、けれどほんとに喰べない方がいゝです。」

「はゝア、では。」と保村君は惡戲さうな瞬をして「私の方へ御渡し下さるには差支へないでせう。」

栗瀬は蓋を取つた見た。と、一聲の叫聲を擧げて皿の中をぢッと凝視めた。顏色は其皿の如く白くある。

九　果然青灰色の紙卷筒……神の如き探偵の物語

栗瀬は抑も何を見たのだらう。

皿の中央に青ッぽい灰色をした一卷の紙の卷筒が橫はつてゐるのだ。彼はそれを取り上げた。喰ひ入るばかりに瞰めてゐるかと思ふと、やがて確乎と胸に抱き占めて、歡呼の聲を擧げながら、狂人のやうに室內を躍り廻るのであつた。そのうちに感激の疲勞でグニヤ〳〵になつて、椅子へドカリと頽折れた。瞬はずおくと氣絕もしかねまじいので、我々は慌てゝブランデーを飮ませてやる。

「まア、〳〵！」と保村君は慰め顏に肩を叩いて「そんなに夢中になつては不可い。けれど我輩これで芝居氣のあるのはたしかだからねえ。」

栗瀬は其手を取つて接吻した。

「あゝ、貴君の上に祝福あれ！　貴君は僕の名譽を救つて下さいました。」

「なに、我輩の名譽までが危いところであつた。全くアレですゼ、

貴君が上官の命令に對して馬鹿間違ひをやられるのが御厭のやうに、我輩も事件を失敗るのは實に七里けッぱいですわい。」

栗瀬は貴重な書類を外套の一番奥の懐中に收つた。

「此上貴君の御食事の御邪魔をするのは何とも失禮ですが、併し僕は死ぬほど知り度いんです、何うしてこれを手にお入れだつたか、何處で御見付けになつたのだか。」

保村君は先づ珈琲を啜つて、それから豚肉と鶏卵とを平げ、さて立上つて、パイプに火を點け、自分の椅子へ腰をおろして、

「先づ最初に我輩が取つた手段をお話しませう、それから、何故そのやうな手段を取るに至つたかの源因をお話しませう。」と語り出した。「昨日停車場で諸君にお別れしてから、我輩は附近の好景を賞しながら愉快に散歩をして、里布經といふ美しい村まで行つた。その一軒の旅館で休息して、用意の爲めにフラスコへ水を詰めたり、懐中へサンドウキッチを入れたりした。そのうちに夕方になつたから、もう一度王翠町へ引返して、丁度日沒少し過ぎ頃、栗瀬さん、貴君のお宅の外の往來へ着いたのです。

そこでト、我輩は往來に人影の絶ゆるのを待つて居つた——あの往來は餘り人通りは繁くはないやうですな——そしてから、柵を乘

り越えて庭へ飛び降りましたよ。」

「門が開いてあつたでせうに。」

「開いてはゐました、けれど我輩元來柵の乘越しなぞが大好きでしてね。庭へ降りるには、あの、樅の樹が三本立つてゐるところがありますね、彼處を撰んだね。つまり枝の蔭で決してお宅の人に見付かる心配がなかつたからです。いよ〳〵飛び降りると、藪から藪を潜つて歩いて——まアこのズボンの膝が散々になつてゐるところを見て下さい——とう〳〵貴君の寢室の窓の前に立つてゐる石楠の樹の下まで辿り着くと、そこへ蹲みこんで事件の發展を待つてゐました。

貴君の室の窓の目隱はまだ降りてゐなかつたから、千嘉子さんが卓子の傍で書見をして居られるのが能く見えました。十時十五分になると千嘉子さんは本を閉ぢ、窓の扉を閉めて出て行かれた、其室の扉を閉める音も聽えました。其時錠に鍵をおろして行つたのは確です。」

「鍵をですか？」

「左樣、それといふのは我輩が豫め千嘉子さんに、御自分の寢室へ御引込みの時は栗瀨さんの室へ外から鍵をかけて、その鍵を御自分

で保證して下さるやうにお賴みしたからです。千嘉子さんは我輩の注文をば一々嚴密に守つて下すつた。委くあの方の聰捷がなかつたならば、その條約文が今頃貴君の手に入つて居るかどうか危いものであつたですぞ。で、千嘉子さんは室から出なすつた、燈火も消えた、後はたゞ我輩が數の中に蹲まつて覗ふてゐるばかりです。

昨夜は誠に美しい夜であつた。けれども徹夜する身にとつては仲々退屈ぢや。無論心持は亢奮して居る。丁度獵師が川岸に隱れて大きな獲物を待ち受けてゐるやうな樂みはあつたが、さりとて待つ身に取つて長いこと、……町の方からは寺院の時計が十五分毎に響いて來るが、その間の待ち遠しさといふものは、もう時計が止まつて了つたんではないかと思はれるばかりでね、でも漸く朝の二時になると、不意に近所で門を密と引き拔いて、鍵を廻すギー〳〵といふひそやかな音が聞えて來た、と思ふと、勝手口の方の扉が明いて月光の中へ浮び出たのは奥瀬春藏君です。」

「え、春藏君！」

と栗瀬が大聲を出した。

「出て來た姿を見ると、帽子は被つてゐない、が、肩の上へ黑い合羽を掛けてゐる。これは萬一人目に觸れた時直樣顏を隱す用心でせ

う。先生月光を避けて、壁の陰影ばかりを撰んで爪先で歩いて来たが、いよ〳〵あの窓下まで着くと、長い刃の小刀を窓框へ突きさして鍔を外した。外すと窓を明け、小刀を扉の隙間に入れて横木を退け、とう〳〵すつかり明けてしまつて、内へ忍びこんだ。

我輩の隠れてゐるところからは、室内の様子、彼の一々の行動が手に取るやうに能く見ゆる。先生、まづ燭棚の上の手燭を二つとも點して置いて、それから入口の扉に近い邊の絨毯の隅を上げに掛つたものです。捲くり上げて身を屈めたと思ふとね、一つの四角な板片を取上げた。あの瓦斯会社の職工が、瓦斯管の接目の工事をするために殘してゆくあれぢやね。それが、實際目撃したところでは、勝手の方へ走つてゐる丁字形の接目に被さつて居つた、その隠し出所から先生開く巻いた一件の書類を取り出した。取り出すとまた板片を穿め、絨毯を元通りに直し、手燭を吹き消して窓から飛び降りた、ところを我輩が首尾よく取つ捕まへたのです。

奥瀬春藏といふ人は思ふたより悪い人ですな。先生、小刀を閃めして我輩に飛び掛つた。止むを得ず二度ばかり敲き伏せたのぢやがヲイ指の關節を一刺しやられましたわい。でもとう〳〵組み敷いたその時の恐しい顔付といふものは、明かに殺意を示してゐる者の顔

付であつたが、懇々と利害得失を説いて聞かすると、断念めて書類を渡しました。書類が手に入ると共に、春藏君をば放してやつたが併し今朝になつて詳細の顛末は纔部探偵まで電報で報じておいた。纔部君が敏捷に立ち廻つて先生を逮捕出來ればそれも宜しいが、まづ我輩の察するところでは、折角急行して參つても犯人は逃走の後であらうと思ふ、すれば政府にとつては其方が一段と宜しいのぢや一つには堀戸卿のため、一つには栗瀬律夫君、貴君のため、此事件が法廷に現はれぬ方が好都合であらうと我輩は思ひます。」

『實にどうも意外な事です！』と栗瀬は息を喘ませて『では過去十

週間、僕が煩悶に暮した長い間、纏まれた書類は始終僕の室にあつたと仰有るのですか。」

『まづさうでした。』

『それで、春藏君が……あの人が犯人なんですか！』

『フムー　春藏君の性格といふものは外貌によらず危險なものですぞ。我輩が其時本人から聞いた言葉で察すれば、先生、株式へ無闇に手を出して大分の負傷を蒙つたところから、その損失を取り戻すためならば如何なる手段をも取らうと思つてゐたらしい。元來が淳身利己心で固まつてゐる男であるから、自分に利益ある機會さへあ

れば實妹の幸福を蹂躙しても叶はぬ、その夫たるべき貴君の名譽を失墜させても何ぞ關せんといふ風である。」

栗瀬はドタリと椅子に沈み込んだ。

「あゝ、頭がグル〳〵旋轉りさうです。ほんとに御話を聞いて目が眩りさうです。」

保村君は例の教授的態度を持して、

「貴君の事件で最も難所と致したのは、餘りに證據が有り過ぎるといふことでした。だから、眼前に現はれた凡有る事實の中から、眼〳〵日と認めた點のみを拾ひ集め、それを順序よく接ぎ合せて、終に驚

くべき一大事實の連鎖を得たのである。我輩は最初から春藏君を疑ふて居つた、と申すのは、あの密室盜難の晩、貴君は彼と同行でお宅へ歸る手筈であつた。して見ると、外務省をよく存じてゐる彼が貴君を役所に訪ねて誘ふて歸るといふことは有りうべき事である。それから乘んで一昨夜のお話であるが、何者かゞ貴君の寢室に忍び込まうとした。ところが此室には春藏君のほかに物を隱しておくやうな人は他にない——何故と申すのに、貴君が原井ドクトルに連れられて倫敦から歸られるまで其室に居つたのは春藏君でせう。其晩貴君より一歩先きに歸つて其室に入つて居つたが、貴君が病人とな

つて連れ込まれるに及んで、其室を明け渡さねばならなかつたでせう——さういふお話を聞いてから、我輩の彼に對する疑念は總て事實に變じた。況んや、曲者が、君後人が初めて貴君の傍から離れた其夜を的つて忍び込まうとした事實を見れば、其曲者たるや正に家内の事情に通じた者に違ひないといふ結論に達するではないですか。」

「僕は何といふ盲目でしたらう！」

「そこで我輩が骨折つて手に入れた事實の眞相はかうである。春藏君は五月二十三日夜猿巢町に面した扉の方から外務省へ入つて行つた。役所の樣子は能う知つてゐるから、眞直に廊下を通つて二階の貴君の室へ入つて見た、此時が丁度貴君が珈琲の催促に小使室へ降りてゆかれた直ぐ後である。で、室へ入つて見ると誰も居らぬので其場で鈴を鳴らして見た、が、直ぐに彼の眼に入つたのは卓子の上の例の書類、何心なくチラリと見たのであるが解つた、非常に貴重なる國家的の密書がゆくりなくも眼前に轉がつて來たのだ、と思ふた瞬間、それをば手早く懐中に捻じ込んで行つて了ふた。御存知の如く、寢惚けた小使が、二階で鈴が鳴ると貴君に告げたのは、それから數分間經てからの事、その間に犯人は悠々と落ち伸びる事が出

來たんぢやね。

さて役所を逃げ出した彼は、停車場に驅けつけ、第一の汽車で王琴町のお宅へ歸つた。室へ入つて改めて檢べて見ると、實に容易ならざる獲物であるから、先づ一番安全と思ふところへ隱して了ふた彼の意では一日二日の中に取り出して、佛國大使なり何なり、値段の好かりさうなところへ賣りつけるつもりであつたでせう。ところが貴君が不意に戻つて來られた。そして意外にも早速その室から追ひ出され、爾來少くも二人の人はその室に在るといふ有樣になつたから、折角の寶物を取り出す機會がない。其間の彼の心事たるや實

に狂ふばかりであつたらうと思はれますね。併し漸く或好機會が來た。で、忍び込んだけれども、あいにく貴君が眼醒めなすつたからまた〳〵計畫が齟齬して了ふた。御記憶ぢやらうが、貴君はあの晩に限つて催眠藥を召上らなかつた。」

「覺えてゐます。」

「我輩の想像では、彼、その催眠藥を賴りにして、多分貴君が熟睡して居られるだらうと思ふたらしいのが、まんまと失敗したのです勿論、我輩は彼が再擧を企てるに違ひないと睨んだから、そこで貴君にわざと倫敦へ去つて頂いて、室を空虛にして誘ひをかけた。が、

昨日晝間のうちに入られると都合が悪いゆゑ、晝間のうちは千嘉子さんに一歩もあの室を去らぬやうにして頂いて、夜を待つた。夜になつての冒險は既にお話した通り。一體我輩は條約文があの室にあるに違ひないと鑑定はつけたものゝ、さりとて板を殘らず剝がしたりなどして大騷動を致すのは好まぬゆゑ、彼自身の手を籍りて、隱し場所より自然に取り出させたわけで、これ即ち濡手で粟の摑み取りですかな、まだ何ぞ合點のゆかぬところがお有りぢやらうか。」

「なぜさた窓から忍び込まうとしたんだらう、扉口から入らうと思へば入られるくせに。」

と予が訊ねた。

「扉口から正式に入るには、都合七つの寢室を通つて來ねばならぬ。それよりは庭から廻れば易々たるものであるからさ。まだ何ぞお有りか。」

「貴君は彼に殺意がなかつたと御考へですか。お話の模樣では小刀は單に窓を明ける道具に使つたに過ぎないやうに思はれますが。」

と今度は粟瀨が訊ねた。

「そりやさうかも知れません。が、我輩は只一つかういふ事は斷言が出來る、それは與瀨春藏なるもの、佛心に信賴するのは木に縁

つて魚を求むるやうなものであるといふ事である。」

我が保村俊郎君は肩を聳かしてから言ふのであつた。

不思議の鈴 終

国会図書館近代デジタルライブラリー
コナン・ドイル
不思議の鈴

訳　三津木春影
発行　大正四年、磯部甲陽堂
変換　トントカイモ 39

奥付

不思議の鈴

http://p.booklog.jp/book/106391

著者 : tontokaimo39
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/tontokaimo39/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/106391

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/106391

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ